

## 1. 全体の印象

幻冬様の作品、大変興味深く拝読いたしました。『学校の裏山』は、佐藤楓、梅岡貞夫、田中勇氣、佐田譲二という4人の異なる視点でストーリーが語られるユニークな構成で、さまざまな謎が徐々に解き明かされていく過程が醍醐味ですね。読み手としては、クライマックスまで一直線に進んでいく物語が、どのように収束していくのか興味がわく構成になっているといえるでしょう。主要な人物にしっかりとキャラを立てて読者が感情移入しやすく描くこと、または重要なシーンを劇的に読ませるなどのメリハリをつけると、練り込まれたストーリーが生きてくると思います。

## 2. 本作品の改善点

ストーリーラインはよく考えられていると思うのですが、登場人物の個性を描く文章が不足しているため、ドラマとしての魅力が薄まってしまっている印象がありました。ミステリー小説を読む際、読者が登場人物に感情移入できるかどうかは非常に重要な要素です。読者の思い入れの度合いによって、作品内で発生する殺人等の事件の重みもまったく違ってきますので、人物描写の掘り下げは必須です。特に刑事である主要人物「梅岡貞夫」は、有能で顔が良いというほかにあまり特徴が感じられない印象でした。何かもっと特殊な趣味や特技がある、出自や経歴が変わっているといったキャラを立てる工夫をしたほうが良いかと思います。具体的には、主要人物4人の容姿、性格、口調、行動パターン、趣味嗜好などをはっきりさせてキャラを立てると、読み手側はもっと感情移入できるようになるはずです。

## 3. アドバイス

冒頭部分は物語の起点となる「佐田が玄関から走り出す」シーンから始めたほうが良さそうです。現状は「お金がなくなったので泊めてもらえる家を訪ねてまわる」シーンから始まっていますが、このままではこの行動が読み手には不可解に感じるおそれがあります。冒頭部分以外にも、素直に時系列に沿った流れにしたほうが良さそうな部分はいくつかありました。また、ストーリー終盤に存在感が増す「田中勇氣」まわりのエピソードは、全体のストーリーにうまく馴染んでいない印象がありました。この設定を活かすのであれば、前半にもっと不穏な雰囲気を持たせて、猟奇的な事件を予感させる前ふりがあったほうが良いかもしれません。